

### <追悼文>紺碧の彼方へ : 文学博士中本正智 さんのこと

東, 喜望

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

1995-02-24

## 紺碧の彼方へ——文学博士中本正智さんのこと

東 喜 望

瓶<sup>かめ</sup>にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり 子規

36年前、初めて教壇に立って、教えた歌である。授業のできはよくなかったが、翌週は心機一転して、金田一京助の「心の小径<sup>こみち</sup>」を教えた。これは旧制中学でも習ったことがあり、授業は大成功だった。明治40年、若い筆者がアイヌ語調査のために、単身で樺太へ渡り、孤絶の中で、偶然に採集できた「ヘマタ」(what) という一語を「武器」に、村人との交流を深め、多くの樺太アイヌ語や叙事詩を採集したという、金田一の体験を綴った随筆だが、その終りの部分にある「ことばこそ堅く閉ざされた心の城府へ通う唯一の小径であった」という表現を感銘を以って生徒たちに理解させることができたように思う。

中本さんと「心の城府」を開いて、語り明かしたのは、今を去る14年前の久米島調査の時だったと思う。ちょうど、与那国島の方言調査をおえて来島したばかりの中本さんは、銘酒ドナンをさげて、わたしどもの宿を訪ねてくれた。一本だけにしようねといいながら卓上にした70度の銘酒を汲みかわすうちに、みんなメートルが上がって、家づとにと大事にしまっていたもう一本のドナンも、せがんで、みんな吞んでしまった。気がついたら翌日の3時を過ぎていた。

当時、中本さんは、すでに、南西諸島はいうに及ばず、日本列島の各地を踏査しておられたが、当夜、そんな言語調査の苦勞談(?)を語られた。言語採集では、まず人体の頭部の各名称から聞いていくそうだが、聞き取りが次第に下部へ及ぶにつれて、東北の老婆は暗い顔になり、ついには立ち上ってその場を去るのに対し、わが南島のアンマーたちは、それと気づくと、「エッ、センシェーター(先生達)は、あそこも聞くの?」とちっとためらったのち、むしろリアリズムを発揮して教示してくれたという。南島女性のこの解放性を誇らかに讚美した中本さんの、あの時の明るい笑顔が忘れられない。大海のように、広く大きな人だと思った。それにしても、言語調査がいわゆる人体語の採集から始められることなど、寡聞にしてそれまで全く知らなかったが、思えば、かの金田一も樺太アイヌの子供たちの前で顔の絵を描き、またたくまに、シシ(目)とかエトゥ・プイ(鼻)・チャラ(口)など十数個の肢体名を採集したのであった。聞けば、人体語は長い歳月を経ても余り変化しない言語だという。これが中本さんからご教示を得た最初である。

それから5日ほどが経って、やむなく徳之島を訪ねた。すると、中本さんたちも井之川の方言調査で来ておられ、一夜、徳和瀬の松山光秀氏(元町役場参事・民俗研究家)のお宅に招か

れて、共にうたげの宴をはったが、松山氏の兄や叔父の引く蛇皮線に合わせて、中本さんがみごとに舞ったのをきのうのこのように思い出される。踊りの上手な人であった。翌日、私は廃墟と化した父母の家屋を人夫たちにこわさせ、廃材を焼き払って、翌々日、島をたつたが、それっ切り徳之島を訪ねていない。

そんなことがあって、中本さんとは親しく語り合うようになったが、それから一年後の秋だったか、法政の安江孝司さんや比嘉実さんと一緒に、新宿の壺屋へ赴いたことがあった。満席で、安江さんとぼくら三人は、路上に卓を据えて泡盛を傾けた。秋の夜風が些か肌寒さを感じさせる宵であった。談がまた南島に及び、私は南の海上に帯状に拡がる、川のような流れがあるのを告げ、その水面を三疊ほどもある雌雄の海亀が重なり合って、ゆったりと泳いでゆく風景を語った。昭和23年頃、夏休みをおえて中学（旧制）へ帰校する途中、船上から見た加計呂麻島沖での光景である。この太平洋々上の雄大な自然のドラマは、当時の閉塞した時代状況からしばしばくらを開放してくれたものであったが、降って、この時、中本さんをもひどく感銘させたようで、そんな海上のドラマに出会えた幸せを賞で、私に「カメのアズマ」という渾名をつけてくれた。

南の海と、その海辺に生きる人々のなりわいについても詳しい人であった。比嘉さんと共著で出した『沖繩風物詩』の中に、自らデッサンした諸々の漁具や漁舟（サバニなど）の図を収めている。共に参加した久高島や渡名喜島の調査の中間報告書でも、いわゆる海人の生活を描いた図が収められていたように思う。

いつだったか、中本さんが、サバニで漂流した祖父の話をしたことがある。体力の消耗を防ぐために、小舟に身を横たえ、雨水と尿を貯めてなめながら、風向と星座を頼りに2週間後、無事帰還したという。その強靱な精神力と智慧、荒れ狂う大海を小舟で半月近くも漕ぎ渡るその航海技法—私は驚嘆した。これこそわが南島・海洋民の原姿にちがいない。中本さんのこの話を、勝手ながら、学生に語り聞かせたことがあったが、ぢいさまのこの精神力や叡知が中本さんの中にも立派にいきているように思えてならないのだ。そういえば、糸満や久高島の海人たちが午後からやって来て、30尋もある海底にすもりして、フカのあそこを撫でながら、素早く輪にしたロープで尾を縛り、引きあげるのをいくたびも箱メガネを通して見たことがある。彼らはその日で徳之島から沖繩へ帰ってゆくのだ。沖繩の海人たちにとっては、奄美諸島や七島など庭先のようなもので、人間が勝手に引いたラインなど（県境・国境等）おそらく彼らの意識の中にはないだろう。

中本さんにそんな話をしたこともある。それにしても、わが南島では、どうしてフカのことをサバといい、草履のことも亦、サバというのであろうか。そんな質問にも、中本さんは即座に答えてくれた。カード（掲載図参照）にペンを走らせながら、SameがSabaへ転音してゆく論理と、サバ（草履）の語源が漢語のSauba（草鞞）であることを分かりやすく説明してくれた。ある著名なお方から、「うるま」の語源は、「うる」の「間」（平面）、即ち、「珊

「瑚の島」だと教わったことがある。とんでもない。「うる」は、「潤い」に通じ、その語源

中本正智先生の方言カード

saba	煙	{	kemuri (samui)
		}	keburu (sabui)
魚	same	/	魚
	samri + a.	>	saba
	sabi + a	>	saba
saba	草履	草鞆	sau → sa: sayba
			saba
砂糖	satai	漢字	
	satai		

15行  
コレクト 1988 8/10  
C-761(B6)

は「水」で、「水に浮かぶ島」が正しい意味だと、主張されたのも中本さんである。方言や古語の一語一語にも緻密な比較・分析を加え、その意味をとらえているのが不勉強な私などにもよくわかった。かつて、レプチャ語を批判して登場した国語学者が、近年、タミル語を日本語の同系統の言語ととらえ、南インドと弥生文化の関連性を主張しているのにも、慎重だったようである。表面的な些細な事実の類似だけで関連性をとらえる性急さを戒め、その背後にある言語の構造から問題にすべきを常に語っておられたように思う。「文化は波紋のようなもので、水面に浮かぶ物体が移動しなくても他へ伝わって行くものだ」と中本さんの言われたのが忘れがたい。

沖縄や奄美の海彼の浄土、ニライ・カナイ（ニルヤ・カナヤ）についても、旧説を批判して、「土の屋、日の屋」がその語源で、すべての生命の源泉たる太陽の地中のすみかを意味すると説かれたのも中本さんである。この卓越した斬新な学説は、1985年1月の『ユリイカ』や琉球新報（13回連載）、1988年6月の『宗教と現代』に公表されているが、同年、私が環太平洋沿岸に伝承される太陽神話を、ある大学の特別講座で語ることができたのも、中本さんのこのような学説に教えられたからである。フォークロアやエスノロジー、文化人類学にも通暁した学殖豊かな学者であった。

当時、比嘉実さんがバンコックのタマサート大学へ在外研修に赴いていて、招かれて、同年12月、中本さん、横田礼子女史（現、大原社研課長）とともにタイを訪ねたことがある。チェンマイの洞窟寺院ワット・ウモンを訪ねた時も、中本さんは、仏教伝来以前の在来信仰では、ここに太陽を祀ったのだと語り、注意深く洞窟を観察しておられたが、何よりも忘れ

がたいのは、同年晦日のジョホールバールの一景である。

海辺で夕食をすませたばかりは、南海の美酒に多少うかれ、左に白亜の王宮を微かに見ながら、ジョホール水道沿岸を東へたどったが、満天の星を仰ぎながら比嘉さんと中本さんがかたく肩を組み、大空に語りかけながら歩いて行った、その姿が忘れがたい。その時、わたしは二人がかたい友情のきずなに結ばれているのを初めて知った。おそらくそれは肉親以上のものだろう。そしてまた、二人が南島の選ばれたる、気鋭の学徒であることを直感した。

それにしてもあの時、二人は南十字星に、何を誓ったのであろうか。「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」北津軽のかの気障な俊才のように、こんな詩句を決して口にするような二人でないことを誰よりも私は知っている。亀のように、遅々として進まぬ私などとは違って、久米島でお会いした時、中本さんは既に『琉球方言音韻の研究』や『与那国方言の研究』を出版しておられ、その直後に『図説琉球語辞典』（1981年）を公刊して毎日出版文化賞を授与され、同年、『日本語の原景』を刊行しておられる。ここでは割愛するが、比嘉さんも亦、同様の成果をあげている。名利にとらわれぬ真摯な学徒によって、今まさに、新しい沖縄学が掘り起こされているのだ。己が旧説に拘泥する余りに、先人たる権威をかさにきて、こうした若いナイーブな学徒の斬新な発言を封殺してはならないのだ。かの封建の世にあってさえ、契沖や真淵は自由討究の精神を最も尊しとしたことを知るべきである。

タイから帰って間もなく、中本さんは、「ミノルゥに病気させないように」と言ってお縄文化研究所の所長室にある2頭のシサーに魂込めをしたことがある。初め私は冗談かと思っていたが、ご本人は大まじめで、どこから取り寄せたのか、あの帯状のお線香と、塩やお米を供えながら、オモロともクェナーとも聞こえる不思議な「祝詞」を高らかにとなえた。そんな中本さんの人としてのやさしさを思うと胸が詰まる。

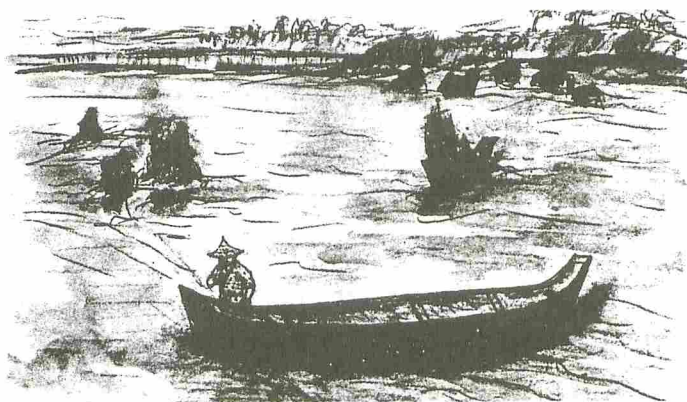
いつも冗談をいい合っては談笑していた中本さんであるが、共に、渡名喜島の調査にかかっていた1986年ごろ、文学博士の学位を授与され、1990年、じつに960頁に及ぶ畢生の大作『日本列島の言語史』をまとめあげる。門外漢の私など、もちろん、これを語る資格は全くない。ただ、拝聴した講演や研究発表から中本さんの研究が、ユーラシア大陸や環太平洋の広汎な言語圏を射程に据えながら進められているのが、わたしのような者にもよく理解できた。大変なお仕事だったにちがいない。11年前、私もある仕事を仕上げた半年も病臥したが、その後、中本さんは二度入院された。

昨年秋だったか、安江孝司さんと一緒にお見舞いにうかがった時、枕辺の卓上に花が生けてあった。あの子規のように、仰臥しながら、花を見つめ、その命をいとおしみ、いとおしみ賞でていたにちがいない。そんなことを思うと、こみあげてきて、もう一字も書けなくなる。

中本さん、もっともっと教えていただきたいかった。そして、何よりも南の青く広い海と美しい島々のことを、誰よりもあなたと、とわに語りつづけたかった。中本さん、こんどは、

紺碧の彼方一ニルヤ・カナヤで会おうね。そしてまた、あの時のように、ドナンを傾けよう。  
さようなら、中本先生。

(白梅学園短期大学教授)



サバニとウミンチュー（舟と漁師） カット・中本正智